

7. 暫間の間接歯髄覆罩法（I.P.C）の歯髄に及ぼす影響に関する臨床病理学的研究

後藤 譲治，○古豊 泰彦，中村 友美，間宮ゆかる
（長大・歯・小児）

生活歯髄は極力保存すべきであるという歯髄保護の観点から，特に歯根未完成の幼若永久歯においては，生活歯髄を保護し，可級の歯髄組織に侵襲を加えないことが得策であると考えられる。

齲蝕が極めて歯髄に接近している深部齲蝕の処置に当って，露髄の恐れのある部分の罹患象牙質を全て除去することなく，意図的に一部これを残留させ，一定期間後再度処置を行うことによって，歯髄組織を露出させ損傷を及ぼすことなく保存する方法に，暫間の間接歯髄覆罩法（Indirect Pulp Capping. I.P.C.）がある。

本邦においては，暫間の間接歯髄覆罩法に関する研究は極めて少なく，特に人間歯牙を用いた病理組織学的検討は皆無の状態にある。そこで，深部齲蝕を有する人間永久歯並びに幼若永久歯に対して，暫間の間接歯髄覆罩法を施し，臨床病理学的に検索した。

実験に供したのは，深部齲蝕を有する人間幼若永久歯及び第3大臼歯，計10歯である。これらの歯牙に対して，局所麻酔後ラバーダム防湿下に齲窩を開拡し，軟化象牙質の除去を行った。この際，歯髄に極めて接近していると思われる部分の罹患象牙質は，全て徹底的に除去することなく一部残留させたまま，間接歯髄覆罩剤として水酸化カルシウム製剤あるいは酸化亜鉛ユージノールセメントを用い，アマルガムで窩洞を閉鎖した。そして術後臨床的に観察を行い一定期間経過後，病理組織標本を調製し顕微鏡下に観察を行った。その結果，若干の興味ある知見を得たので報告する。